様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：２４３０２
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８６６１

研究課題名（和文）幼児期における「親密にみえる支配関係」の実態と指導方法についての協働研究

研究課題名（英文）Collaborative research on the seemingly close but dominant relationships in infancy

研究代表者
服部　敬子（HATTORI, Keiko）

京都府立大学・公共政策学部・教授

研究者番号：７０３２４２７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　【研究１】保育者にアンケート調査を追跡的に実施し、２～５歳児クラス、異年齢混合クラス担任312名の回答を分析した結果、５歳児クラスのほぼ７割で「支配的な関係」が認知されており、他の年齢に比べて有意に割合が高いこと、３歳以上児クラスではその関係が持続、つまり固定化する傾向があることが明らかにされた。対応方法については、「様子を見る」が３歳児クラスで、「働きかけたが変化なし」が５歳児クラスで有意に多かった。
　【研究２】参加観察と保育者への聴き取り調査を行い、支配的な言動に対して周りの子どもたちが意見を言えるようになる過程の条件について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、幼児期における支配的な関係が保育者にどのように認知されているかについて300名以上を対象に追跡的な分析を行うことができた。その結果、３歳児クラス以降に認知される「親密にみえる支配関係」は、「様子をみる」だけでは持続する傾向があり、５歳児クラスになってその関係を変えようと働きかけても変わりにくいことが明らかになった。こうした関係の問題性を感じながらも「どうしたらよいかわからない」という保育者が多く、子ども自身も葛藤を抱えていたことから、研究者との協働によって関係改善に向かった過程を分析し、具体的な方法と変化の要因のいくつかを明らかにできた意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：　In study 1, nursery teachers in charge of 2-5 year-old or 3-5 mixed classes responded to the questionnaire that inquired about their recognition of “Controlling relationship” among children. Analysis of 312 follow-up answer sheets revealed that nearly 70% of 5-year-old teachers recognized the controlling relationships and the rate was significantly higher than the other classes. In 3-5 year-old classes, the relationships were found to be apt to last. It became clear that high percentage of 3 year-old class teachers kept watching the state calmly for a while, on the other hand, many of 5 year-old class teachers had made efforts but it was hard to change the relationship.
　In study 2, through participant observation and hearing from class teacher, the process became clear with a condition for the other children to become able to show their true feelings.

研究分野：保育学、発達心理学

キーワード：幼児期　親密性　支配的な関係　集団づくり

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

内閣府（2015)『平成 27 年版　子供・若者白書』によれば、学校により認知されたいじめは、平成 25（2013）年度は 185,803 件と、前年度（198,109 件）から若干減少したものの、小学校では 118,748 件（平成 24 年度 117,384 件）であり前年度から引き続き増加している。最も典型的ないじめ行為である「仲間はずれ・無視・陰口」について、半年ごとの被害経験率（その期間に一度でも被害を受けたことのある児童の割合）をみると、小学校４年生から中学校３年生になるまでの６年間（調査 12 回）に一度も被害を経験しない者は 13.0%、加害を経験しない者は 12.7%に過ぎないこと、また、４割前後の子どもが６年間で被害・加害ともに６回以上経験していることが明らかにされた。

「いじめ」場面に遭遇した際に、いじめる側に加勢、もしくは傍観するという行動は、いじめをより強化すると考えられ（Schwarts ほか，1993)、4 分の 3 の児童はいじめへの加勢・傍観をするという（O'connell ほか，1999)。そこには子ども間の「支配関係」が影響するという指摘がある（本郷，1996、富田，1999)。保育の実践報告（『季刊 保育問題研究』）によれば、自分の要求を通すために他児を従わせる子どもは、腕力・運動能力に優れ、遊びが面白く、クラスメートの憧れ的な存在であることが多い（三浦，1998、岩松・小林，2002、平田，2009 ほか）が、「従わせる」やりとりは「大人の目の届かない所で巧みに」され、従っている子どもの「ストレスが下の立場の子に向けられ、その子はまたその下の立場の子に向ける、という構造」となったり、特定の子どもを継続的に仲間はずれにする関係になったりする（三友・田中，2000)。「いじめ」とみられる事例は幼児期から見出されており（遠藤ほか，1997、村田・佐藤，1998、畠山・山崎，2003)、好きな友達を「支配」したいという気持ちがいじめにつながったと振り返る当事者の記録もある（原田，2007)。

関係性攻撃を行う子どもは仲間から拒否されやすく不安や孤独感をもつという報告（Crick,1997 ほか）がある一方で、友情形成スキルや主張スキルが高く（磯部・佐藤,2003)、仲間内地位が高いという報告（畠山・山崎,2002）もある。年長児は年中児よりも「関係性攻撃」を行う者が増えること（畠山ほか,2005)、関係性攻撃を行う幼児は相手の感情を推測する力が高く、そうした攻撃を「悪い」と判断していることが明らかにされている（畠山・畠山,2012)。こうした報告からは、関係性攻撃を行う子どもの不安や孤独感を理解し、その子の緒能力を認めていかすような機会をつくり、周りの子どもたちがその子のいいなりになったり拒否したりしないように適切な指導を行うことで、よきリーダーとなる可能性を秘めていることが示唆されている。保育者がこうした関係に気づいて適切な働きかけを重ね、子どもたちが主体的に集団遊びを展開できる５歳児クラスになった場合、ルールを勝手に変える、命令するといった「ボス」的なふるまいを周りの子が批判するようになり、対等な関係のなかでボス的な子ども自身も変化していくという（広瀬・磯部，2012)。「いじめ」の成立要件の１つである「加害者の複数性」を未然に防ぐためにも、「親密にみえる支配関係」の発生過程とその指導方法に注目することが必要かつ新しい視点であると考えた。

２．研究の目的

４歳ごろから「相手に合わせる」自己制御力が発達し、一緒に遊ぶ友だち数も増え、幼児期後期には一見親密な「支配関係」もみられはじめる。こうした関係が幼児期の「いじめ」につながることがあると考えられるため、まずはその実態を明らかにする。４歳児クラスから５歳児クラスへの変化を追跡し、「支配関係」を崩して「対等性」にもとづく親密な関係を構築する指導方法について保育者との協働によって明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

【研究１】　京都府内の民間保育園と滋賀県内の公立・民間園の保育士にアンケート用紙を配布し、延べ 515 名から回答を得て（回収率 82.3%)、うち２歳児～５歳児クラス、幼児混合クラスの担任、延べ 305 名分を分析。（調査時期）第１回 : 2017 年４月下旬～５月上旬、第２回 : 2018 年８月なかば～９月上旬。（質問内容）現在のクラスでの「気がかりな友達関係」（関係希薄、トラブル多発、よく一緒にいるが楽しいか疑問、ボス的な子ども－従属的な関係）の数、具体的なエピソード、対応方法等。複数回の研修会で研究趣旨の説明をして配布し、当日回収、もしくは後日に各園で集約して回収を行った。

【研究２】(事例 A) 201X 年６月～翌年３月なかばまで、K 市内保育園５歳児クラスで月に２、３回、朝の自由遊びの時間から昼食まで参与観察を行い、４月生まれの A 児（アイデアが豊かだが、「提案」ではなく命令、強引にやろうとする。一番であることにこだわる。多くのクラスメートから怖がられている）を中心に筆記によるエピソード収集を行った。うち１、２回は担任とカンファレンスを行い、そのときどきの担任のねらいや指導の意図、観察時間外のエピソードなどをうかがった。園内で２回事例検討会を行って他の保育者とも共有した。

（事例 B・C）201X 年７月から K 市内保育園４歳児クラス（２か園）で月に２回程度参与観察を行いエピソードを収集するとともに、担任が「周りの子どもに怖がられている」とみる２名の男児に関する聴き取りを開始した。ただし、B 児は転園、C 児は保育者の都合により研究中断となった。

４．研究成果

【研究１】

(1)「楽しいかどうか疑問」、「支配的」な関係の有無についてのクラス年齢別比較

第１回調査時に「支配的な関係」が「ある」と回答されたクラスの割合をクラス（年齢）間で比較すると有意差が認められ（$\chi 2(4,\ N=102)=13.8,\ p<.01$）、残差分析の結果、2 歳児クラスで有意に少なく、5 歳児クラスで有意に多いことがわかった(Fig. １)。第２回調査の結果では、「支配的な関係」の有無割合では有意な差の傾向（$\chi 2(4,\ N=91)=8.1,\ .05<p<.10$）、「楽しいか疑問」では有意差が認められ（$\chi 2(4,\ N=91)=9.7,\ p<.05$）、残差分析の結果、いずれも「幼児混合」クラスが有意に多く、後者では２歳児クラスが有意に少ないことがわかった。

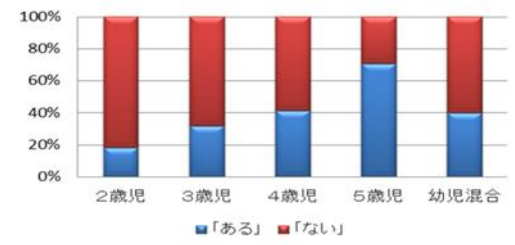

Fig.1 *「支配的」関係の認知：クラス別割合（第１回時）*

(2)「楽しいかどうか疑問」、「支配的」な関係に対する働きかけの方法

これらの関係を認知している保育士の対応・手応え（a.様子を見る、b.働きかけたが変化なし、c.方法がわからない、d.働きかけている）について、２回分の回答を合計してクラス年齢別で割合を比較したところ（Fig.2)、クラスによって対応方法等の割合に差が認められ（$\chi 2(12,\ N=117)=24.4,\ p<.05$）、残差分析の結果､「様子を見る」が３歳児クラスと「幼児混合」クラスで有意に多く、５歳児クラスで有意に少ないこと､「働きかけたが変化なし」が５歳児クラスで有意に多いことがわかった。

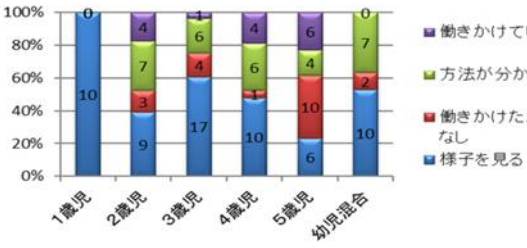

Fig.2 *「疑問」「支配的」関係への対応方法（２回分合計）*

(3)「楽しいかどうか疑問」「支配的」な関係の１年後の変化

第２回調査で第１回調査からの追跡結果が得られたクラスの中で、関係の変化をみた結果（Fig.3)、３歳児クラスまでは関係が解消あるいは新たに出現する割合が高く、３歳児以降では「支配」関係が継続する割合が高いとみられる。

上述の(2)および(3)の結果から､「様子を見る」「方法が分からない」と回答した保育者が７割以上にのぼり、５歳児クラスでは「働きかけたが変化なし」が４割を占めることから、具体的な対応方法の究明と周知が必要とされることがわかった。

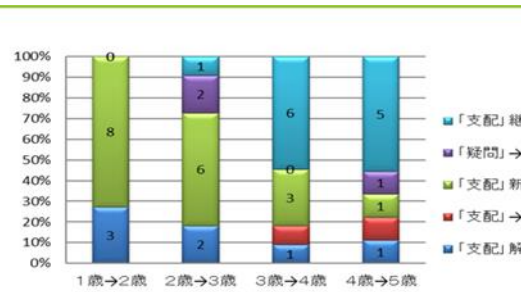

Fig.3 *１年後のクラスにおける関係変化の割合*

(4)「働きかけの方法」に関わる自由記述

親密さのなかに支配的な関係が認知されていたクラスのうち､３歳児では｢様子をみる｣(60%)、「方法がわからない」(21%)、４歳児では順に 48%と 25%、５歳児では 21%と 17%で、「働きかけたが変化なし」が５歳児の 38%で最も多かった。そこで､｢以前に手応えのあった働きかけ」についての自由記述（N=61）をみたところ､【双方の思いをよく聴く】【思いを受け止める、代弁する】ことが多く基本的に取り組まれ､立場が弱い子､従っている子の【意見を言う力】を育む、【認め合う】経験の中で【自信をつける】ことをねらって、「弱い立場の子の得意なことや頑張ったことを取り上げてクラス全員で認める機会をつくる」､「帰りの会で『楽しかった／嬉しかったこと』を話す機会をつくり一人ひとりにスポットをあてて認める」といった取り組みもあった。「きつい口調やいやな言葉はそのたびに注意」し、「陰でしないように、こちらがきちんと見ている」ことも意識的に行われていた。「保育士で意地悪な場面の寸劇／紙芝居をして子どもたちに見せて話し合う場をつくる」､「よくない行動のみ批判するのではなく、なぜそうしたのか、見ていてどう思ったか、自分だったらどうするか、これからどうしたらいいか？と考えさせる」、「合わせる子たちに『本当はどうしたい？』と問いかける」など､【自分／他者の気持ちを考える】機会が設けられていた。「立場の強い子が困って弱い子に助けてもらえる場面をつくる」､「グ

ループを組み替える」、「立場の弱い子の遊びを盛り上げて強い子を巻き込む」など、強－弱、主－従の関係を覆す【頼り頼られる関係づくり】も重要な視点として抽出された。

【研究２】

A 児を中心とする自身の参与観察にもとづくエピソード記録数は、Ⅰ期（６～８月）に 31、Ⅱ期（９，10 月）は 25、Ⅲ期（11，12 月）は 30、Ⅳ期（翌年１～３月）は 34 であった。A 児に関わるエピソードを、「笑顔・いきいき」（A 児も周りの子も笑顔が見られた場面）、「トラブル」（A 児の言動によって他の子どもが泣く、怖がる、暗い表情になった場面）、「その他」（A 児と他の子どもがトラブルなく活動をともにする、対等に言い合うなどの場面）に分類し、その数と割合の変化を Fig. 4 に示した。χ2 検定を行ったところ、この４期区分では有意差が認められず、9～12 月をまとめて 3 期区分で検定を行ったところ有意差が認められ（$\chi^2(4)=12.88, p<.05$）、残差分析の結果、1%水準で「トラブル」は 6～8 月に多く、翌 1～3 月に少ない、「笑顔・いきいき」は翌 1～3 月に多かったことがわかった。

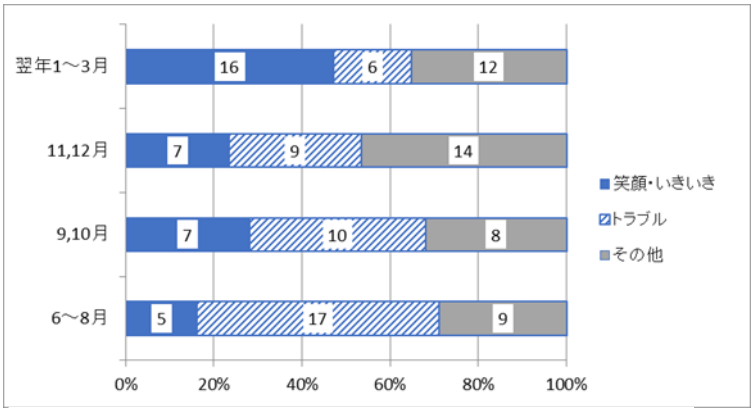

Fig.4　*A 児を中心とするエピソード記録の分類割合変化*

A 児は X 児との親密性を強く求めていたが拒否されるようになり、とくに行事前になると攻撃性が高まったが、「A 児の言いなりにならない」Y 児と同じ班になったこと、午睡がなくなり５歳児が園庭を独占してダイナミックなごっこ遊びとオニごっこができるようになったこと、「朝に負けても『またお昼にしような』」と言えるようになったことで他児らと「楽しい」経験を共有できるようになった。その関係をベースとして、１月なかばに A 児が他児に攻撃的にふるまった場面で話し合いがもたれ、その時に「オレの何が悪いんや！」と初めて他児の前で大泣きし、「どうしていいかわからない」という A 児の訴えに子どもたちが耳を傾けて意見を出し合うことができた。以後、A 児は友だちに「弱みを見せる」（担任談）ことができるようになり、できないことを「教えてもらう」ことができるようになった。こうした過程により、支配的な関係が「対等な関係」へと変化したことが、A 児の「笑顔・いきいき」エピソードが増えた要因であると考えられた。個別の対応にとどまらず、子どもどうしが楽しい経験を媒介に多面的に認め合い、ホンネを言い合える集団づくりの方法をさらに追究したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 服部 敬子
２．発表標題 幼児期における「親密に見える支配的関係」の発達的変化 ―保育士へのアンケート追跡調査にもとづいて―
３．学会等名 日本発達心理学会　第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 服部 敬子
２．発表標題 ボス的にふるまう子どもの指導上の難しさと集団づくりに関する研究
３．学会等名 日本保育学会　第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 服部 敬子
２．発表標題 ボス的にふるまう子どもと周りの子どもとの関係変化 ―支配的な関係から対等な関係へと変化した要因をさぐる―
３．学会等名 日本発達心理学会　第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 服部 敬子
２．発表標題 ボス的にふるまう５歳児をめぐる指導と変化過程の分析 ―ホンネを言い合える関係形成の要因―
３．学会等名 日本保育学会　第73回大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考